



被爆地に空ある限り小鳥来る
秋岬の太平洋に目を浄もろふ
轉来て森に広がるポピュリズム
面構へ仏心厚きへこきむし
稲滓火や成らう事なら木偶坊
血のにほひする石舞台文化の日
空蟬は特攻兵の忘れもの
稲滓火をはなるる煙や殞
雲の疾き風待ち湊沖の女郎
疎ましきとも穠穂の明るさを
きりりしやん秋茄子ほどの意地欲す
草の実の待むは己が底力
ミサイルの警報大根蒔きてをり
象の足ほどの舞茸負ふ子かな

*

小谷一夫
眞榮城いさを
宮地良彦
土屋忠史
岩間嘉一
柏田浪雅
倉科繁登
久根美和子
許勢元貞
小口洋子
木幡ティ
古屋洸
小林春代
飯田六斗

秋出水佐渡を押しやる濁りかな
畑飛び出す南瓜は山にくれてやる
畏ろしき師や全身で跳ぶ蟻蛸
生前は今でありけり草の花
蟪蛄の砂に死すれば太陽葬
被らざる角帽なりき京の秋
青臭きトマト齧りし夜汽車かな
敗荷のからから一茶来たのかと
粃殻の燃え漆黒になりゆけり
むらさきの山霧曳きて父母が来る
月曜の地球の自転秋思ふ
菊花展一巡すれば卒寿なり
悠久の時流れゆく稲つるび
木洩日が降りきて秋の寺男
蓑虫の力量風にはからるる
天の川兵器売り買ひする地球

長谷川みきこ
米山節子
満田光生
川阪潤子
成瀬嘉一
水口達彦
夏目重美
吉澤清
名取大輔
大澤淳基
伊藤由希子
塚原白里
福田藤十郎
柳原清泉
中岡草人
窪田美子

岳俳句・拓くことば 十二月

(460)

宮坂 静生

はじめに。いよいよ岳創刊四十周年へ向けて、全力疾走が始まる。それに先立ち、十一月二十三日現代俳句協会創立七十周年記念大会が帝国ホテルで開かれ、盛んに愉しく、大きな会が終った。平成時代の終りに戦後のめめ括りの歴史を刻んだことになる。午後の部全国俳句大会七〇〇余名、夕刻からの式典、祝賀会五七〇名という各界からの来賓と、協会員ともに俳句という日本文芸の粹とはなにかを噛みしめたことは長く記憶したい大きな出来事となった。私はささやかな思いをこめ、式辞を書いた(協会機関誌「現代俳句」二〇一八年二月号掲載予定)。岳俳句会のこれからのあり方も意識しながら俳句の明日を記したので、折があったら、協会員でない方もお読みいただければありがたい。

被爆地に空ある限り

被爆地に空ある限り小鳥来る 小谷 一夫

長崎在住の作者。長崎の浦上の地を思い浮かべる。戦後七十年経っても原爆投下地の重い事実は忘れ難い。しかし、秋になると、そんな人災を知ってか知らずか、小鳥が渡ってくる。ほっとする。「空」の無色透明感はすばらしい。こだ

つ。冬に入ると窓枠にいたる亀虫の類にもこの称がある。「仏心厚き」といえば、こゝは三井寺ごみむしを指すか。仏心と下から出るもの。これは虫でも自然現象だから関わりない。

血のほひする石舞台文化の日 柏田 浪雅

飛鳥の石舞台は蘇我氏との関わりが推測されている。入鹿暗殺を企てた中大兄皇子(のちの天智天皇)は近江に都を移すが、飛鳥はとも血腥い。いまの文化の日は、日本国憲法が公布されたことを記念し文化国家を象徴する日になっているが、どこか文化にはその美名の翳に血のにおいがする。鋭い指摘であろう。

今月の秀句

稲滓火や成らう事なら木偶坊 岩間 嘉一

稲滓火は田仕事の稲屑を焚く火。そんな火をつくろいながら、一年も大方済んだ感慨の作。あれこれ天候相手の田仕事のたいへんさと思うと、なにも自主的な判断をしないでいわれた通り動く「木偶坊」の境涯が懐かしいと思う。そんな状況にはなれないが、小さな頃から親がぼうっと立ってなにもないでいる者を木偶坊といっていたことを思い出す。あの否定的なことばを、いまは身近に感じる。

わりがない。世界につながる大いさがある。「小鳥来る」ほど明るく、幸せな季語はない。

秋岬の太平洋に目を浄ふ 眞榮城いさを

秋は遠くまで目路がはたらく季節。宮古島在住の作者だけに、秋の岬に佇ち太平洋の海原に心洗われるさまが伝わる。かぎりなき海。島人は古来、海に浄化され、日々癒され、やがて海へ還ってゆく。東平安名岬の眺望はわれを忘れる。

鶴来て森に広がるポピュリズム 宮地 良彦

渡り鳥の親分格の鶴が来た。森の小鳥たちがごとくなく鶴になびくようだ。その雰囲気をも「ポピュリズム」(大衆迎合主義)とみたもの。世はトランプ時代。トランプ嫌いでも、どこか調子を合わせる気分が世界にひろがる。中には金子兜太のようにトランプが嫌でスランプ(空っぽ)と称している人もいるが、鳥の世界にそれを見たのがおもしろい。

面構へ仏心厚きへこきむし 土屋 忠史

放屁虫を「へこきむし」と俗に称す。三井寺ごみむし。二センチほどの黒い虫。黄色の紋をもち、かまうと悪臭を放

空蟬は特攻兵の忘れもの 倉科 繁登

太平洋戦争末期の特攻兵をいま省みると空蟬のようなもの。さすがに特攻兵にはその抜け殻まで始末する余裕がなく、海の藻屑となってしまった。無理死はいつもせつない。

稲滓火をはなるる煙や 久根美和子

通夜のため亡骸が祀られている。殯だ。農村の田園風景を背景に設定している。田仕事の火からあがるうすい煙。日常の光景の中に置かれた死は、軽い。淡々と無常な現実が捉えられている。故人の生涯の稔りをそれとなく思わせる。

雲の疾き風待ち湊沖の女郎 許勢 元貞

「沖の女郎」は学名ひめじという魚。体長十センチほど。体全体が鮮紅色。その派手な色彩からの命名か。日本海詠どこか、一昔前の湊町風景のようだ。時間がゆったりと流れている。「風待ち湊」にはせわしい現代からの郷愁がある。

疎ましきとも穂穂の明るさを 小口 洋子

暖国では稲刈後の株から穂が出る。中には穂を立てる。いく分黄色がかったみどり一面の田。その中途半端な明るさを「疎ましき」と捉えた感性が鋭い。いじらしいと同情し共感しないで、あゝ嫌だわ、はっきりしない曖昧さと見る。

拓くことば ③ 自句寸言(19)「曲がる葱」

天に風鳴りていよいよ曲がる葱 昭和56年

「岳」（昭和五十七年一月号）所載。「天に風鳴つて」が初出。松本平でも初冬の畑にはまだ葱がある。自家用だ。寒くなると、根は地中へ、茎は風の向きに曲がる。頑固な山人人のような。季節の的確な把握の中に、俳句の志が感じられる。空に吹く風を「天」と表し作品に重量感を備えた」（福田甲子雄『名句鑑賞辞典』角川書店）と書いて貰った。地貌が注目され、驚いた。『樹下』所収。

冬に入る 滝の 硯の一屯 昭和56年

この年十一月二十一日一泊、信州大学学生会が五十六年度卒業組のまくり出し乗鞍高原吟行をした。日は射すが霰混じり。掲句は善五郎滝詠。国文三年生小林貴子が「岳」三十号に吟行記を書いている。山岸剛、武田岳人、藤山和子、富樫均、杉本桂子が卒業組。貴子他、山見智子、吉野志保子、太田恵美、野原邦子が在学生。清水治郎詠「高樅に雪来る摩利支天岳見ずや」。みんなに慕われた治郎も元気な頃。「袋廻し」を初めて学生会でやる。「別るる日檣山に枯れ到りけり」も同時詠。滝

の硯のような人懐こい連中であつた。『樹下』所収。

深夜の鐘 大きな雪にあたりたる 昭和56年

「鷹」で飯島晴子に褒められた作。山寺牛伏寺へ二年参り道中、ぼとりと大粒の雪に当たった。途端に今年も終わると感じた。四十四歳盛んな頃だ。『樹下』所収。

電球 買ひに少女が走る 山ざくら 昭和57年

「岳」（昭和五十七年六月号）所載。居間は螢光灯でも、納屋はいまだ電球を吊っていた。わが好きな原風景詠。囑目ではない。すばしい小学生の少女がおつかいに、村角のなんでも屋まで、夕方六〇ワットの電球を買いに飛ぶ。母にいわれて家を飛び出す日永、山桜が咲く頃である。戦後感もあった。湘子推薦句「花林櫓髪切りてけふ昏からず」（鷹「七月号」とともに、我が愛唱の我が句。『樹下』所収。

田が植わる小学生は九時に寝よ 昭和57年

「鷹」（昭和五十七年九月号）所載。懐かしい回想句。田が植わる。親が授業の資料作り（ガリ切）で、夜更かし。子も十時になっても寝ない。癪癪玉が落ちる。九時に寝よ。命令である。すごすごと寝床へ。『樹下』所収。

きりりしやん秋茄子ほどの意地欲す 木幡 テイ

「きりりしやん」は一茶の〈きりりしやん〉としてさく枯梗かな（『七番日記』）の擬音を連想させる。かいがいしく身を引き緊める情景などに用いる。小型ではあるが秋茄子のしまった感じをいい、老いてもだらしがない意気地を詠う。汚染に怯まない相馬地域の作者。

草の実の 持つは己が底力 古屋 洸

象徴的な詠い方に、草の実に托して生きる「底力」をそれとなく、自分に言いかけた一句といえよう。

ミサイルの 警報大根蒔きてをり 小林 春代

携帯スマホや有線放送などから警報が鳴る。丁度大根の種蒔きさなか。ミサイルが飛んできても、私は大根の種を蒔く。この日常を非常時にさせたくないという心構えの作。

象の 足ほどの舞茸 負ふ子 かな 飯田 六斗

大きな舞茸だ。山で採った茸を背負って山を下る。茸採りで生計を立てている一家か。子の存在が一句を個性的な作にしていよう。比喩「象の足」も子にひびく愉しさがある。

以上の他に雪嶺集、前山集からの推薦候補作をあげる。

とりかぶと愛しすぎたと思ふ時 小林 貴子

霧深し黄泉の途中にゐることし 円城寺 龍
流木を有めてゐたる虫の闇 奥山 源丘
待宵のしほさる蔵すとんぼ玉 松本よし乃
舞茸食ぶ踊り上手になるかしら 堀川 節子
迢空忌からりとかわく絹の足袋 中岡 草人
人悼むこころに水の澄みにけり 功刀たかね
新北風や波の穂先の浮きたがる 三島 信子

畑を飛び出す南瓜の荒々しい迫力

畑 飛び出す 南瓜は山にくれてやる 米山 節子

南瓜の旺盛な生命力。畑の枠を越えて裏山まで蔓が悠々と繁茂している。手に負えないのである。その先にいくつか実をつけているが、それまで収穫しきれない。「山にくれてやる」との粗々しい表現に、農村暮しの自然と半ば妥協しながら作物作りをすすめる自然体がうかがわれる。農業一筋とうかがう作者のたくましさに共感する。

畏ろしき師や 全身で跳ぶ蟬蛻 満田 光生

畏ろしはかしこまる意。もったいないくらい敬意を表わす。畏の字は頭に鬼が載っている象形文字。師弟関係を詠い、ぴりぴり緊張している弟子を蟬蛻に喩えたものか。作者のどこか蕪村風の空想句であろうが、一句の背後に、私など

は作者の指導教官尾形仿教授を思い浮かべる。いまでも学生時代のゼミナールの夢を見て、蟬蛻になって飛躍。途端に夢から醒める。懐かしきかな、よき学舎。

生前は今でありけり草の花 川阪 潤子

類想句がありそうであるが、死後になって「生前」ということがしきりに用いられる。後にいわれる生前とはまさに今なんだ。しっかりやっておかなければという。秋の草の花を軽々と置き、十二音のフレーズを毀さないようにやさしい配慮がある。淡白な詠い方に死後まで見通した賢さがある。

蠮螋の砂に死すれば太陽葬 成瀬 嘉一

「太陽葬」がユニーク。ぎらぎらがやく太陽光線ばかりの砂地。そこに蠮螋の骸。火葬というか太陽葬。人間も不毛な砂漠などで行途を失えばかまきりと同じ。人類の果はみんな太陽葬にならざるを得ないのか。虫けらの句であるが、大胆この上ない怖ろしい句でもある。

被らざる角帽なりき京の秋 水口 達彦

京都での戦後の学生生活を省みての作。旧制高校時代のようにに角帽にマントといった風姿ははやらない。時代は安保騒動などに象徴される激昂の時代。しかし思えば、あんな激しい時代に千年の王城の地で学生生活をすごしたことにかぎらない流離の思いを抱き、懐かしんでいる。よき青春かな。

りではない。極楽浄土への往還に漂う天地を繋ぐ色である。父母はいまどこでどんな暮しをしているか。父母を思えば、父母が現われる。これが愛の極致。祈りは愛である。

月曜の地球の自転秋思ふ 伊藤由希子

日曜の次に月曜が来る。つとめに出かける。秋は透明な季節。季節が刻々と過ぎゆくのが見える。秋のふしぎさにふと立ち止まった作。「月曜」への着目が新鮮。

菊花展一巡すれば卒寿なり 塚原 白里

若いときから「岳」一筋の房総の俳人白里さんも八十九

今月の秀句

秋出水佐渡を押しやる濁りかな 長谷川みきこ

新潟市在住の作者にとり、この川は阿賀野川であろうか。佐渡を押しやるほどの秋出水とはスケールの大きな川を想像する。大量の濁流が海へ流れ込む。川の色と海の色との違いが鮮やか。川の勢いは沖に浮かぶ佐渡を押しやるほどだという。月並の俗流表現一步手前で止まり、ことばの捻り以上に光景にリアルな迫力が感じられる。俳句のおもしろさは捻りにあるが、そこに掲句のよくな現実感が伴うと立派な一句となる。自然の威力を感じさせ、俗調は消え、場景が目には浮かぶ。

青臭きトマト齧りし夜汽車かな 夏目 重美

夜汽車というと私は石川啄木の「わかれ来て燈火小暗き夜の汽車の窓に弄ぶ青き林檎よ」(『一握の砂』)を思い浮かべる。掲句は「青臭きトマト」であるが、どこかで啄木の「青き林檎」に響き合う青春の挫折感を懐かしく思い出す。苦学生などということばはもう使われないが、夜汽車には、いまでも青春の涙や叫びや苦学や貧しさなど、時代を超えた胸をじんと締めつける哀愁がある。

敗荷のからから一茶来たのかと 吉澤 清

破蓮が風からからと鳴る。蓮田は総の国のシンボル。一茶流離の地であった。その音を聞くと、へおや、一茶が来たのかね」と、風来坊一茶が懐かしいという作。「敗荷」と一茶とを枯れきった「からから」の音で繋いだのが秀逸。

粃殻の燃え漆黒になりゆけり 名取 大輔

粃殻が燃えた黒さにおどろく。単純な句には違いないが、こんな些事の感動こそ俳句の原点だと私は共感する。感性が鋭くゆたかでないとい見逃すところである。

むらさきの山霧曳きて父母が来る 大澤 淳基

山霧の中から父母が現われる。「むらさきの山霧」とのふしぎな色にはっとする。むらさきは宝塚のレビューの色ばかり

歳。ゆつくりと菊花展を巡って来れば、もう卒寿。おめでたい。母が常田深雪さん。「岳」の初期、闊達な方だった。

悠久の時流れゆく稲つるび 福田藤十郎

稲光を稲が交わり結実する「稲つるび」とはこの上ない瑞穂の国のことば。悠久の時の流れの端に居て、稲光から来る方を感じる思想が重厚だ。関東平野の俳人の風格の作。

木洩日が降りきて秋の寺男 柳原 清泉

「秋の寺男」のフレーズに共感した。表現に滋味がある。

蓑虫の力量風にはからる 中岡 草人

風が揺らして蓑虫の優劣を判定するとは着想が秀逸。蓑虫好きとは自然への情愛が深いこと。心眼の人草人さんも八十八歳。全身で句作をされるすばらしさ。

天の川兵器売り買ひする地球 窪田 美子

天の川の向うから天帝はどんな思いで地球を見ているか。上記以外の岳集推薦候補句を掲げる。

邯鄲やよき人はなぜはやく逝く 古畑富美江

桔梗踏めば大雨降りし小学校 曦 達久

希望とは雨後の秋日のようなもの 柿谷 有史

柿を剥くありあふもので足る暮らし 真弓ぼたん

年二十六頭くぢら解体所 小林 亘